

(3) 源頼朝と土屋三郎宗遠一族

「小田原文庫刊行会、石橋山合戦前後」より

ア 頼朝挙兵のこと

・ 頼朝の誕生と平治の乱

源頼朝が一個の流人として伊豆に姿を現したのは、永暦元年（1160）の春のことであった。前年の平治元年（1159）暮れに起きた平治の乱で、父の左馬頭源義朝が平清盛との戦いで敗走したとき、彼は平家方に捕らわれて、伊豆国蛭ヶ小島というところに流されてきたのであって、年は14才になったばかりであった。

さて頼朝誕生は、一般には久安3年（1147）4月とされているが、あるいは翌久安4年の正月であるとの説がある。

父義朝の数多き子息のうち第三男として、尾張国熱田神宮にほど近い旗屋の里（熱田旗屋町）に生まれた。この地の浄土宗の寺院誓願尼寺（享禄2年（1529）創建）のあるところが、その誕生地であるといわれて、寺内に頼朝霊社もあるが、母は熱田神宮の大宮司藤原季範の娘で義朝の正室であった。

父義朝の全盛期には、幼くして官位も進み、保元3年（1158）に12才で皇后大夫権少進になり、1年の間右近衛将監、蔵人とすすみ、平治の乱のときは藤原信頼の進奏によって、13才で従五位下・右衛佐に任官しているが、これを長兄義平・次兄朝長に比べると、兄たちより官位は高かった。

ところが、平治の乱は頼朝13才の初陣であったにかかわらず、源氏の大敗となったので、父はいったん東国に家重恩の武士たちを集めて再興を計ろうというので、義平・朝長・頼朝の三子をとめない、20数人の家臣を従えて都を落ちていったのであるから、頼朝も落人のひとりとなった。

一行が近江国に入ったとき、彼は疲労のあまり馬上で仮眠しているうちに、一行の列から離れ、12月27日の夜、森山の宿で落人狩りする土豪に襲われたが、馬上から敵2人を斬り危うく虎口を脱して父の列に追いついた。翌日また美濃国関が原で大雪の中ではぐれて吹雪の山野を彷徨ったが、情けある老夫婦に助けられ、翌年春まで山奥の片田舎にかくまわれた。2月9日に至って、平清盛の継母池禅尼の子尾張守頼盛の家人弥平兵衛宗清という者に捕らえられ、京都の六波羅に護送された。

一方、父の義朝は尾張の野間荘内海で旧臣長田忠致に謀殺され、長兄義平・次兄朝長も非業の最期を遂げたのであるから、捕らわれの身となって京都にある頼朝の生命だけが無事でありようはずがなく、頼朝の生命は明日にも明後日にも処刑されるべき風前の灯りであった。

尼（池禅尼は藤原宗兼の娘で、清盛の父忠盛の後室となった人）は、頼朝の言動に非常に心を動かし、頼朝に直接会って心境をたずねて、父祖兄弟の冥福を祈って、読経三昧に入ろうという頼朝の気持ちを聞いたので、実子平頼盛（清盛の異母弟）や平重盛（清盛の嫡男）らを説得して奔走させたので、遂に死罪を許されて伊豆に流されることになった。

・ 流人頼朝をめぐる人々

頼朝が蛭ヶ小島に流されてきたころの伊豆国をみると、多数の土豪が所領によって武士団を組織して離合争和を繰り返していた。その主なものは、東海岸に伊東・工藤・宇佐美の諸氏があり、中央盆地には、北条・狩野氏や伊豆目代の山木判官平兼隆があった。関東は源頼信・頼義・義家三代以来の源家重恩の地だといわれるけれども、関東のすべての武士団が源氏に心を寄せているわけではないし、特に源氏の棟梁家が全滅的打撃を受けて、それに代わって、「平家にあらずば人にあらず」といわれる程に、全盛を極めている清盛に対して正面から反抗をする者はなく、伊豆の土豪たちも、皆平家に対して一応の忠誠を誓っていた。

それゆえ、清盛が王朝時代の慣例に基づいて、流配遠島地の伊豆に彼の配所を設定したのは、誤りであったと即断するわけにはいかない。「虎を野に放ったもの」であったというのは、結果においてそうなったのをみて、後世の批判するところとなった。ただ武家でありながら平治の乱後、都の地において全く貴族化した清盛とその周囲の人々が、中央での高い位置と、強い権力を得ることだけに意識を集中させて、地方の統制を忘却しがちであったのは事実であった。平家の荘園は天下に半するといわれたが、藤原時代と同様に地方豪族にとっては不在の領家であった。

このような中で、東国の武士団が蓄えていた武力が、ひとたび統制され、ある有力なる人物によって指導されたときは、恐るべき力を発揮しようとしている気運の底流していることを、あらかじめ見抜くことができなかったのは、清盛の大きな過失といえることができるであろう。

流人の姿といいながら源家の嫡流頼朝は、このような情勢の東国に下って来たのであり、伊豆には早くもさざ波が立ちはじめていた。

しかし、清盛は伊豆に流すにあたって、全然配慮しなかったわけではなかった。同国の二大豪族ともいえるべき、伊東の伊東祐親と、北条の北条時政とを監視役としたのであるともいわれ、また蛭ヶ小島東隣の山林に、一族の平兼隆を住まわせて、厳重に見張らせていた。

伊豆において頼朝は、伊東祐親の娘八重姫と、また北条時政の娘政子と恋仲になり種々の問題を起こすのである。

承安2年(1172)	頼朝	26才	八重姫	17~18才
安元3年・治承元年(1177)	頼朝	31才	政子	21才

いうまでもなく頼朝は政子を妻として、源氏の地盤を固める基礎をつくったのであり、時政としても頼朝を娘の婿にすることを密かに狙っていたのかもしれない。

・ 旗あげまでの経過

政子事件がありしばらくの後、北条時政のもとに帰って、北条館の中に住んでいたようであった。そして、この頃から頼朝のもとに出入りして、奉仕する人々も多くなった。

いわゆる伊豆・相模地方に拠っている土豪武家たちであった。こうした周囲の動きの中にもまれながら、また、こうした社会の空気を呼吸しながら、20年に近い年月

を送ってきた頼朝の心境は次第に大きな変化をもたらしてきた。

とくに政子と結ばれて、時政を義父として、それを背景の力として持つようになってからは、一層の賑わいを呈するようになった。

安達盛長は、頼朝の乳母比企局の娘婿として、伊豆配流の初めから奉仕していた。ほかに北条時政とその長男宗時・次男義時・狩野茂光・宇佐美助茂・天野遠景・加藤景廉・小中太光秀などの伊豆土豪や、相模在住の武家としては土肥実平・土屋宗遠・岡崎義実・大庭景義（景親の兄）・佐々木秀義とその子定綱・経高・盛綱・高綱の兄弟などが元来給仕の主な人々であった。

そして、そこへ京都の三善康信から中央政治の情勢が次々に報告されてきた。

この20年の歳月を経過している間の京都中央政治の情勢は、どのように動いていたのだろうか。平治の乱に大勝を博した清盛は、政治的・経済的手腕を揮って、乱後急速にその地位を高め、かつ固めていった。

大輪田泊（神戸港）を開き、音戸の瀬戸をうかがって瀬戸内海の海上権を握るとともに、日宋貿易の重要地点である太宰府に、家人を配置して貿易の利益を独占した。

また、その全盛時代は、平氏は日本六十六ヶ国の半に達する三十余国の国々を領し、全国に500余の荘園を持っていた。

かつて、藤原氏が全国に多くの荘園を持ちながら、その統制が完全でなかったため、土地から遊離してしまっ、名主たちが離反してしまったことにかんがみて、清盛はこれらの領国や荘園の統制強化に力を注いだ。領国の国司には家人を任命し、荘園には地頭を置いたが、一族の国司として任地に赴く者は稀で、領主の不在の有様で、平家の権力を傘に着た目代が、地元でいたずらに威を張るにすぎなかった。

武士階級全体の利益を考え、その所領の保護・安堵に努めることはしなかったの、全国武士の信頼をつなぐことができなかった。

清盛の理想とするところは、貴族の生活であった。そして、かつて目のあたりに見てきた藤原氏の栄華であった。彼は皇室をはじめ公家との間の結婚によって結び、藤原氏と同じく天皇の外祖父の地位に立って、政権を執行しようとした。娘徳子（後の建礼門院）を高倉天皇の中宮に入れ、自らは太政大臣となって、皇子の誕生を待った。

一族みな高官に上り、「平家にあらずんば人にあらず」といわれる程であった。

こうして平氏は貴族化することによって、武家としての特色を失っていった。清盛が、このような大きな権力を握ることができたのは、院にとり入ったからであり、初めは院政の支持者としての立場を失わなかった。したがって、院政をとっていた後白河法皇も、初めは清盛を信頼したが、清盛の横暴がつのるにつれて、その信任も次第に失われて、両者はやがて対立の関係に立つにいたった。

公家の平家に対する反感は次第に高まり、法皇の近臣の中には、ひそかに平氏に対する打倒の計画をめぐらすものさえあった。鹿谷の陰謀というのがそれである。しかし公家の力ではどうすることもできず、この計画は失敗に終わった。

治承の年も2、3年と進むにしたがって、京都には不安の気分が濃く底流し始めたが、それにもかかわらず、平相国清盛の専横はいよいよつのり、治承3年（1179）11月になって、清盛は強いて奏請して、法皇の近臣39人の官職を止め、次いで院政を停止せんことを請い、遂に法皇を鳥羽殿に幽閉し奉るに至った。

治承4年（1180）になり、4月22日に高倉天皇の譲位により、中宮徳子の生んだ皇子が3才で天位についた。安徳天皇である。そして福原の新都に遷都も行った。

しかるに、それより先4月9日には、すでに源三位頼政の挙兵があり、頼政の奉じた以仁王の令旨が天下に檄されていた。

しかし、4月9日の挙兵が4月26日には、宇治川の戦で頼政は討死し、以仁王も流れ矢に当たって薨じて終わった。

伊豆国の流人前佐兵衛源頼朝は、源家の嫡流であるから、特別に彼宛に令旨を発せられることになったが、その御使として新宮十郎義盛が選ばれた。この人は、頼朝の祖父為義の末子であって、平治の乱で源氏没落のときより、紀州熊野の新宮に身をひそめていたが、この当時は、京都に帰って住んでいたのも、令旨の全国布達にあたっては、特に東国は伊豆に頼朝がおり、奥州に義経がおり、源氏重恩の武家のひそんでいるところであるから、他の人でははばかり有るべしとして、特に義盛が選ばれた。彼は無官であったので、この重大な役目に無官では良くないということで、即座に蔵人に任命されたので、十郎蔵人と名乗り、義盛改め行家と称し、挙兵の日4月9日に令旨を賜って、翌10日の夜半に、東海道を下った。

頼朝のいる北条館に到着したのは4月27日であった。

・ 頼朝に参じた郷土の武士たち

都における諸情勢と以仁王の令旨により、義ある心堅き重代の家人たちは、忍び忍びて夜口に北条の地に参集してきた。

その中でも頼朝の最も頼みとした大きな力は、伊豆における北条時政はいうまでもないが、西相模における中村宗平一党と東相模における三浦義明一党の三家であった。

房総の千葉介胤も有力な味方の家柄であるが、道遠きため、この時は参集できなかった。

中村一党を代表するものは、土肥郷（湯河原町）の土肥次郎実平父子、土屋郷（平塚市土屋）の土屋三郎宗遠父子であり、三浦党を代表するものは、岡崎城主（伊勢原市）岡崎四郎義実とその子真田城主（平塚市真田）佐奈田与一義忠であった。

これらの人々のほかに、伊豆では工藤介狩野茂光父子、宇佐美助茂父子、天野遠景父子、加藤景員とその子光貞・景廉兄弟、相模では大庭景義、佐々木秀義とその子たちであった。

この中の大庭景義は異色ある人物であった。彼は頼朝と石橋山で戦った敵軍の大將大庭景親の実兄であった。大庭氏は鎌倉権五郎景政の子孫で、高座郡大庭城（藤沢市）に拠った豪族で源家三代相伝の家人であったが、景宗の長男景義は懐島（茅ヶ崎市）に住んで平太景義といった。保元の乱のとき源為朝に膝の節を射抜かれたという大庭平太というのはこの人である。彼ら4人兄弟は、石橋山合戦のときは、敵味方に分かれて戦ったのであり、景義は最後まで頼朝に忠勤をはげみ腹臣のひとりであった。

・ 頼朝挙兵

8月17日、ついに山木館の襲撃は開始された。大將は北条時政で、嫡男宗時が先鋒となって、次男義時・佐々木三兄弟・土肥・土屋・岡崎・真田・大庭平太も加わって、家の子・郎党も合わせて85騎であった。そして、ついに山本館は落され、北条館の庭上に参集して、頼朝の前に山木判官平兼隆主従の首を閲覽に供したのは、8月18日の暁天であった。頼朝は数日の後、兼隆の追善供養を行って、修業者を招いて唱導をつとめ、兼隆とともに死んだ人々のために冥福を祈った。

・ 石橋山合戦

* 関係日譜

治承4年(1180)

- 8月17日 頼朝挙兵。夜山木兼隆の館を急襲し落とす。
- 8月19日 頼朝夫人政子を伊豆文陽坊に託す。
- 8月20日 頼朝伊豆を発して相模に向かい、同夜土肥館に宿泊する。
- 8月21日 — この両日、土肥館に止まって軍議をこらし、敵状を探る。
- 8月22日 —
- 8月23日 頼朝手兵300を率いて石橋山に陣する。この日曇り、夜に入って大雨となる。敵将大庭景親3000の軍と雨中の激闘天明に及び、頼朝遂に敗れて後山に逃げる。この時真田与一義忠(25才)とその郎党陶山文三家安(57才)は討死する。
- 8月24日 頼朝梶山の堀口に止まって、大いに追撃の敵と戦う。敗走して梶山の奥に潜入する。山中で敵の梶原景時の厚情によって難をまぬかる。夜、箱根権現別当行実の使者永実の来迎をうけて、権現に至り永実宅に宿泊する。
この日、北条宗時・狩野茂光等、伊東祐親の軍に追われ平井郷早川辺にて討死する。
- 8月25日 早朝、箱根権現を出発する。箱根を通り、小道峠にかかり、小道地藏堂の難に遭う。夕方危機を脱して再び梶山に潜入する。
- 8月26日 — この両日消息不明。おそらく鷗窟(ししどのいわや)に潜伏したものと思われる。土肥実平夫人のひそかに運ぶ食によって餓をまぬがれる。
27日北条時政等岩の浦(真鶴町岩海岸)より舟にて安房
- 8月27日 — (あわ)に先行す。[世にいう七騎落ち]
- 8月28日 頼朝主従岩の浦より脱して安房に向かう。出港に先立ち、小早川遠平を伊豆山に遣して、政子夫人に消息を報告する。
- 8月29日 頼朝の舟、安房国獵島に着く。

この石橋山合戦における、山中での手引き・道案内等に、土肥実平・土肥(小早川)遠平・土屋宗遠らは大きな影響力を及ぼした。

- ・ 中村一党、土肥・土屋氏の加勢

頼朝が伊豆に配流中、早くから蛭ヶ小島の館や北条の館に出入りして、奉仕した西湘地方の人物に、土肥実平とその子遠平、実平の弟の土屋宗遠という者があり、年と共に重要な役割を演じて活動するようになった。

「吾妻鏡」や「源平盛衰記」を見ると、山木館の夜討ちの兵を催すあたりから、しばしばその名があられてくるが、「源平盛衰記」のそのときの条に「土肥・土屋・岡崎の輩は元来給付し奉る云々」といっていて、以前から奉仕の人々だということを述べている。

また、同書の山木夜討ちの場面では、兼隆配下の剛勇関谷八郎が、「今夜の夜討ちの大將は、北条・佐々木か、土肥・土屋か、加藤が党か」と呼ばわれるところがあって、土肥・土屋が頼朝周囲の有力人物と目されていることを示している。

イ 頼朝逃亡のこと

すぎやま

- ・ 敗戦、梶山への潜入

8月23日の石橋山の合戦は、疾風吹き荒れ豪雨降りしきり中での、終夜にわたる壮烈な接戦であった。もともと多勢に無勢で、兵力に大差があったので、勝利の望みは薄かったが、それにしても緒戦での与一義忠とその郎党たちの戦死は、頼朝方には致命的な大打撃となった。

義忠討死の後には、源平互に兵を入れ替え入れ替えして戦ったが、敵は多勢で、その勢いに乗じており、味方は多くの痛手をうけ、軍兵ははや疲れ果てたので、頼朝方は天のほのぼの明けること、遂に敗走するの止むなき戦況となった。

そして実平に導かれて、梶山の奥深くに潜入した。

- ・ 鷗の窟に隠る

頼朝は梶山をかき分けかき分けて落ちて行き、鷗の窟という谷間に下ると7、8人も入れるほどの大洞のある伏木があったので、土肥実平・土肥遠平・新開忠氏・土屋宗遠・岡崎義実・安達盛長・田代信綱主従8人が、その大洞の中に隠れた。

そこへ、大庭景親が曾我・俣野・梶原などの平家の面々と、追いかけて来て探し回ったが、頼朝主従の姿が見当たらないので、大庭がそこにあった大きな伏木を見つけて、「その伏木の中が怪しい、空洞の中を探して見よ」というので、梶原景時が、弓を小脇に抱え、太刀に手をかけながら伏木の中をうかがって見ると、その中にはたして頼朝主従が隠れていて頼朝と景時の目と目が互いに見合った。

この時、景時は頼朝を助けようと決意して、折柄その大洞に“くも”が糸を引いたので、それを弓の筈や、冑の鉢にかけて伏木の外に出て、「中には“こうもり”がたくさんで騒いでいるが、ほかには“あり”“けら”一匹もない」といった。しかし、大庭はなお不審がって、自ら大洞を探ろうとするので、景時が色をなしてその前に立ち塞がり、太刀に手をかけて「御辺自ら洞を探ろうとするのは、梶原を二心あるものと疑ってのことか。もしも、中に人がいるなら、弓や冑にこんなにくもの巣がか

かるはずがないではないか。そのような不信の行為をされるならば、梶原の面目にかけて、誰にもこの洞を探らせぬ。」と叫んで詰め寄ったので、大庭もさすがにひるんだ。

そのとき、臥木の中から山鳩が飛び出して、はたはたと羽ばたいたので、皆の者が「佐殿、内におわさんには、鳩は有るまじ」といって引きあげた。

折も折、さしも晴れたる大空にわかに黒雲ひき覆い、雷おびただしく鳴り回って、にわかに大雨となったので、敵は大石を7、8人がかりで伏木の口に立て塞ぎ、引き上げて行った。梶原景時の有情のお陰で、大庭景親一党は傍峰に去ったため、一時梶山付近に敵影なく、頼朝もしばらくは洞窟内で安堵の胸をなでおろした。この事件により、梶原は後に頼朝の重臣となっていくのであった。

このとき、頼朝の傍らに従っていた人物が誰と誰であったかは明らかでなく、「吾妻鏡」には、土肥実平の名のみしか記していないが、主従各々一人というのでは、危険の場合に主人の身を守り難いから、腹臣数人は従えていたと考えてよく、「盛衰記」に実平のほかに、実平の長男遠平、遠平の弟忠氏、実平の弟土屋宗遠、宗平の娘の夫で佐奈田与一義忠の父たる岡崎義実、頼朝の身の回りの世話役安達盛長の6人で、これらは前にも度々述べたように、頼朝の伊豆の配所に早くから奉仕していた人々を記しており、安達を除いては、みな土肥実平の血縁一党であった。

石橋山合戦の頼朝方の策戦と行動とには、土肥実平が中心となって動いていることが察せられる。特に実平がこの合戦の危地から頼朝を守り通した功績は、なんといっても大したものであり、実平を中心とした土肥・中村・土屋・岡崎・佐奈田（真田）の一党の活動は、この合戦における頼朝の主軸であった。

- ・ 岩の浦から房州を経て鎌倉へ

頼朝一行は、岩の浦（真鶴岬）から舟に乗じて房州方向を指してゆき、治承4年（1180）8月29日安房国に上陸した。

先行の北条時政、岡崎義実、三浦義澄一党はすでに安房国におり、300騎の手兵を率いており、千葉介常胤父子は3000騎を率いて下総の国府に入った。また、ここでは平広常が2000人の大勢を率いて来従した。これにより坂東武士の大勢力が結集され、10月6日初めて鎌倉の地に入ったのであり、その行列に加わった兵数は5万騎に達していた。

- ・ 富士川合戦

一方、木曾義仲が9月7日に信濃に兵を挙げ、北陸地方を次々と打ち従えて、京都に上がろうとする氣勢を示してきた。この関東・北陸の形勢が、櫛の歯をしくがごとく六波羅に注進されるので、平清盛もさすがに狼狽して、源氏討伐の大軍を催すことになり、嫡孫平維盛を総大将とする頼朝追討軍が、京都を発したのが9月29日であった。

頼朝がこれを迎え撃たんとして、鎌倉を発して足柄峠を越えたのが10月18日で、「吾妻鏡」にこのとき頼朝に従った軍勢は20万騎の精兵であったと記してい

る。

頼朝が平家の軍と富士川に対陣したのは10月20日であるが、軍兵の数にして平家方は5万人、頼朝方は20万人で、平軍は戦わずして潰走したのは、真に当然のことであろう。石橋山合戦の敗走以来、ここに至るまで50余日で丸三ヶ月に及ばないのであり、驚嘆というほかはない。〔潰走：かいそう：負けて逃げること。〕

・ 合戦前後の西相模の武士たち

当時、武力や経済力に自信を持った豪族武士の中には、自己の実力のみをたのんで、他を顧みない独立心の強烈なものもある。

一方には相変わらず中央強権や貴族達に服従して、その援助によって自己の地方的勢力の拡大を計ろうとする、二つの矛盾しあう精神がからみ合うなどして、関東武士団の動きは複雑であった。

その上、武家は表面には家を重んずるから、血族因縁関係に影響されることも大きかった。頼朝が源家の再興を旗印としての挙兵は、このような情勢の渦巻きの中に投じた大石で、波紋は大きく乱れた。

西湘地方もなかなか複雑であった。この戦いで最も奮闘したのは土肥実平・土屋宗遠兄弟を中心とする中村氏であったが、一党の総師中村宗平が在世中であるにも拘らず、出陣しなかったのは老齢のためであったし、その長男重平の名が表れていないのは、彼はこの時すでにこの世になく、父に先立って死去したものと思われる。

それゆえ、宗平は嫡孫中村景平、その弟中村盛平を出陣させた。しかるに、中村一党の中の有力なる家柄である二宮氏だけは、敵にも味方にも立っていない。二宮氏は兄弟中でひとり中立の立場を執った。

これは、この頃すでに長男の朝忠が、曾我兄弟の姉を夫人として迎えていたためと推定される。この女性は、曾我兄弟の異父の姉であり、この人を妻とした二宮朝忠は、

領土を接する曾我氏から働きかけもあって、動くことができなかったものと考えられる。

西湘の一豪族曾我氏の場合を考えると、当主祐信は、この合戦の起こる4年前の安元2年（1176）に、伊東祐親の嫡男の故河津祐泰（母は宗遠の妹満江御前）の未亡人満江御前（万劫御前ともいわれる）を、後妻に迎えていて、祐親の愛孫十郎・五郎兄弟が満江の連れ子として来ているので、祐信はその養父となっているから、この伊東家との関係は、彼を平家方に走らさずにはおかなかったものであろう。しかし、曾我祐信は戦後いち早く、降人として出たので、頼朝は11月17日祐信を厚免し、間もなく所領を安堵して、將軍隨身の中に加えた。

ウ 平家追討と土肥・土屋一党のこと

頼朝が鎌倉に根拠をすえて、平家を討伐することになってからも、土肥・土屋の活動は続いた。彼らは木曾義仲との戦いのときも範頼・義経に従って出陣しており、一の谷・屋島・壇の浦の戦いにも義経に従って戦っている。また、建久2年（1191）の藤原泰衡の追討軍にも加わっていた。土肥実平にあっては、命をうけて軍を備

中に駐めて、西海経略の軍監となり、軍事を督した。

そして、平家滅亡後は、全国に置かれた守護・地頭を監督し、その横暴を抑さえる必要から、頼朝が武勇の士を各方面に派遣したとき、実平と梶原景時とが、中国地方一帯を治めることを命ぜられていた。

エ 鎌倉幕府における御家人土肥・土屋氏とそのゆくえ

鎌倉幕府の実権を握り、さらに野望を着々進めつつある北条時政・義時父子には、実平が創業殊勲の功臣として、頼朝の特別の信頼と寵愛を受けていることや、彼の剛直自重の性をとかくうとましく思い、敬遠してその経綸を封ずる態度があった。

(注) 経綸(けいりん)：国家を治めととのえること

実平・遠平は良く自重して事なきを得ていたが、このような北条氏に対しての憤懣(ふんまん)の気持ちは、実平にも当時からあったらしい。

実平は、執権北条氏の圧力の強い相模の地においては、充分に足を展(の)ばし、経綸を振るうことの困難さを感じ、後年西海に実力を扶植し、領土も多く持つようになり、西海に土着して、彼自身は土肥に帰らなかったと思われる。

嫡孫維平の時代になるや、建保元年(1213)和田義盛の挙兵(和田合戦)に組した。この時は土肥・小早川党は、当主維平が義盛に与力した。

兄弟父子3人が幕府側の敵となって命を落としたことは、土肥氏には大打撃で、ことに維平は捕らわれの身となって、囚人たること4ヶ月余、建保元年(1213)9月19日に死刑となった。

この合戦で、土肥氏以上の打撃を受けた家柄に、実平の実弟土屋宗遠がある。

宗遠は石橋山の功労者だが、晩年にひとつの大きな不始末をおかしたことは前に記したが、和田合戦について少しふれておこう。「吾妻鏡」建暦3年(1213)5月2日・3日における合戦で討たれた謀叛人方(和田方)の氏名録を見ても、「土屋の人々」として土屋大学助・同新兵衛・同次郎・同三郎・同四郎・園田七郎・同太郎・同次郎・やきる太郎・同次郎以上10人の名が列举される。園田氏は上野国出身の武人であるから、彼以下5人は土屋氏と同隊となって戦った人々らしいから、土屋一族では、土屋大学助以下5人が命を落とした。

殊に大学助は、張本人の一人として目された人物で、同年5月3日合戦終了後に、執権北条家から公告した教書にも、「和田義盛・土屋義清・横山時兼すべて相模のものども、謀叛をおこす云々」と記されている。(注)土屋大学助：土屋次郎義清のこと。

義清は初め土屋小次郎と称して、頼朝挙兵のころは、京都に出て一時は平家に奉公していたが、実父養父一族が、頼朝に同心して挙兵すると聞いて、京都を抜け出て故郷に帰る途中、すでに合戦が起こり、兄与一義忠は討死し、養父宗遠は敗走して甲斐に落ちんとして、足柄峠にかかったところ、義清も峠に達し、夜中に峠で二人が再会することになるが、この劇的な話が「源平盛衰記」に載っている。

(注) 奉公：封建社会で、主家に対して従者が軍役などの義務を奉仕すること。朝廷や国のために力を尽くすこと。他家に住みこんで、家事・家業に従事すること。

(注) 源平盛衰記：参考文献のところで説明する。

前記のとおり、宗遠が晩年に和田義盛から受けた恩義があるので、義盛挙兵に当たっては、主謀者の一人として、一族を率いて参戦したが、このとき義清は兵を率いて、甘縄から亀谷に入り窟堂前の路次を経て、鎌倉御所のところに推参せんとしたところ、若宮通りの赤橋の側で、流れ矢に当たって討死した。命中した矢は、北方から飛んで来たが、人々はこれは神箭（かみかぶら）であったと評判したという。

以上のような次第で、土肥・土屋・岡崎の一族親縁の三家は、各々その家の時の当主が、兄弟父子並んで和田合戦に組し敗れ、叛臣の名を負うて命を失ったのであるから、この事件が三家に与えた打撃はすこぶる大であったといえよう。

(注) 神箭：箭とは、木・竹の根または角で蕪の形に作り、中を空にし、数個の孔をほり、矢の先に付けるもの。射れば穴に風が入って鳴る。箭矢の略。

(注) 箭矢：野矢の一種。先に箭を付けた矢。矢合わせなどの時に用いた。古墳中期以降現れる。かぶら・なりかぶら・なりやともいう。

[参考資料]

石橋山 源頼朝古戦場 佐奈田霊社略縁起

* 佐奈田霊社 (石橋古戦場)

小田原市石橋の南熱海県道から石段を登った丘上に老杉がある。此処を与一塚と呼んでいる。樹前の碑に「佐奈田与一義忠の墓 治承四年庚子年八月二十三日夜」と記されている。

この碑は現在は、堂宇の中に安置されている。延宝・天和のころ、小田原侯の称子美濃守正則の臣田辺権太夫信吉の建てた所で、毎年八月二十三日には近郷の善男善女が群参し、禱賽（とうさい）には、松明（たいまつ・炬）を燈（とも）して、墳前手向けることを例としている。今では毎月二十三日に行われている。

佐奈田義忠霊前に詣ずる者は、「ぜんそく・せきどめ・その他諸願に霊験あり」と、日に月に多くある。

* 石橋古戦場

平治の乱によって、戦いに敗れた源頼朝は、遠く都から追われる流人の身となって、伊豆蛭ヶ小島の配所に、埋木の花咲く春を待つうちに春風、秋風二十年の月日が過ぎた。

治承4年（1180）の春、隠忍若節の報いられる時が遂に到来して、後白河法皇の皇子以仁王の平氏追討の令旨を得た。この時、頼朝の喜びは云わずもがなであった。頼朝は、男山八幡宮を遥拝し、北条時政と結んで早速挙兵しようとしたが、間もなく京都で挙兵した源三位頼政は、宇治平等院の露と消え、ついで以仁王敗北の悲報を受けたので、さすが頼朝も慨然とした。しかし、頼朝はこれに力を落とすことなく、追々近隣の豪族たちが帰服すると決然と起こって、源氏再興の旗を挙げ、八月二十日伊豆の配所を出発して、以仁王の令旨を旗上に結んで、二十三日寅刻石橋山に布陣した。

従う者北条時政父子、藤九郎盛長、工藤茂光、土肥実平、土屋宗遠、岡崎四郎義実、同長子真田与一義忠、中村太郎景平、同次郎盛平など、いずれ劣らぬ鎌倉武士三百余騎で、一方これに向かった平家方は俣野五郎景久、河村三郎義秀、渋谷庄司重国、糟谷権主盛

久、海老名源三秀貞、曾我太郎祐信、龍口三郎経俊、毛利太郎景行、長尾新五為宗、原宗三郎景房、同四郎義行等、平家被官の輩武蔵国住人熊谷直実等を併せ精兵三千余騎、この全軍を大庭三郎景親が統監し、険しい峯に谷を隔てて対陣した。

この戦いに頼朝のたのむところは、三浦義明、義澄の一族であった。三浦一族は頼朝の檄を受けて馳せ参じたが、豪雨のため晩ころになって、漸（ようや）く酒匂川まで到着したが、川水が氾濫して、眼前に石橋山を仰ぎながら、渡河できなかった。

石橋山から遥かにこれを望見した景親は、攻撃が一日遅れれば味方は一日不利を招くことを恐れ、なるべく速やかに事を処することと感じ、俄（にわか）に兵を動かして、二十三日の夕刻を待って、頼朝の陣へ総攻撃の火蓋を切った。空が荒れだして、篠つくような豪雨、その上風さえ加わって真の闇の中の両軍は、一夜激戦に激戦を展開した。

しかし、頼朝方では何れも死を決して戦ったが、多勢に無勢、岡崎義実の息子真田与一義忠以下命を損するもの数名、夜明け方になり、景親は敗走した頼朝の後を追撃したが、日頃頼朝の志を通していた飯田五郎家義が、俄かに反（そら）して防ぎ戦ったため、見す見す頼朝を逃してしまった。これより先、頼朝は敵勢が押し寄せたことを聞いて、諸将を集めて策戦計画を相談した。

そして、「射手には武蔵、相模の名のある諸将は、ほとんど集まったと思わねばならぬ。中でも、大庭・俣野の兄弟は特に手強い相手であり、且つ、きっと先陣になって来ると思う。ついては、これには誰を向かわせたらよかろう」と、皆の意見をたずねた。

すると、岡崎四郎義実が進み出て、「親の口から、この様な事を申し上げるは、どうかと存じますが、我子の真田与一義忠こそ一番の適任者と存じます。と申しますのは、彼は久しく病気をして、まだ回復しておりませんが、何と申しましても彼の右に出る者はございません。大庭、俣野兄弟の相手は、彼奴（きゃつ）に御命じになるのが一番でしょう」と、言上した。

そこで早速与一を召しだすと、青地錦の直垂に赤威の鎧（よろい）を着て、肩白冑に裾金物を飾った冑（かぶと）をつけて、折烏帽子をかぶり御前に平伏した。頼朝は、「大庭、俣野といえど、敵の中でも最も名のある奴原であるが、お前が先陣して彼奴等（きゃつら）を打ち取り功名を立てよ」と命じた。

与一は畏まって御前をさがり、郎党の陶山文三家安を呼んで、「母上や妻に、お前から申し伝えよ。一昨日家を出たときを最後と思って下さい。今回見方の名のある諸将の中から、特に選ばれ先陣を努めよとの御命を受けた。武士としてこれ以上の名誉はないわけである。従って、生きて再び帰れるものとは、少しも考えない。若し、私が討たれたと聞いたならば、二人の我が子を、どんな山奥でも一時隠して、どこまでも生き長らえて、そうして頼朝公が再び世に出られる時世が来たならば名乗り出て、岡崎と真田の家名を継がせてくれ。父岡崎四郎も同じ陣中であるから、これまた無いものと思わねばならぬから」と、最後をくれぐれも頼んだ。

しかし、家安は、「私は貴方が二才のときから、夜は胸にお抱きし、昼は肩にお乗せして一日中ただひたすらに、貴方が成人して、天晴れ人に秀れた武将になられんようにとお世話申し上げました。五、六才になられた時は、竹の小弓を作ってお上げしたり、ご一緒に馬に乗ったりしたこともありまして。そして、今このようにめでたく成人され、しかも主君の特別の思召で、先陣の御命をお受けになった晴れの合戦に、どうして貴方様だけをこの戦場に残して、私ひとりおめおめと帰られましようか。貴方様が二十五才の若桜を、

主君のために散らすご覚悟ならば、私も五十七才のわが身を、貴方様の馬前に散らす考えであります」と答えて、故郷への使いは、三郎丸という童を遣した。

さて、与一が出発しようとするると頼朝は、「お前の装束（しょうぞく）は、あまりにも華やかだから、着替えていくように」と言ったが、「武将が戦場に出て、晴れがまし過ぎるということはございません」と言って、十五騎の者を連れて進み出た。

平家方は、早くもこの華やかな武者振りを見つけて、「彼こそ与一ぞ。打って手柄にせん」と、打向かったが、だんだん夜の幕が下りてきて、姿の識別がつかなくなった。

与一は家安を呼んで、「めざすは、ただ敵の大將、大庭・俣野の兄弟のみ、自分が大庭に組んだら、お前は俣野を討ち取れ。自分が俣野に組んだら、お前は大庭を討ち取れ」と、主従力を併せて大庭兄弟に逢わんものと、豪雨の中を右に左に奮闘した。

平家方の一人岡部弥次郎は、この与一の姿を認めて「良き敵」と馳せ寄った。与一は俣野五郎なりと確認してがつきと受け止めて、組み伏せて手早く首を打斬り、僅かな光りに打ちすかして首を見ると、俣野ではなくて岡部の首であったので、谷間に投げ入れて、またも前進を続けた。

一方、大庭も弟の俣野五郎に、「何とかして真田与一に出会って、彼を討ち取れ。自分も彼を目当てにするから、目指すは裾金物が、殊にきらめいた鎧を着て、白い馬に乗ったのが与一ぞ」と励ました。

この俣野が、この乱戦の中でバツタリ与一と出合った。

しかし、この暗闇の中で、それとは判からず味方の一人と思い込んで、「真田与一という奴はまだ落ちないか」と、声をかけた。すると、その耳元で「真田与一はここにあり。そういうお前は」。「俣野五郎」と答えるや否や、二人はガッチリ組み、馬の間にどつと落ちた。

そして、上になり、下になり、もみ合って山坂を転げ落ち、海岸の断崖上まで転げて行った。遂に与一が上になった。そこで首を斬らせよと、「家安、家安」と呼んだが、乱戦のこととて、側に来ていなかった。そこにやって来た平家方の長尾新五が大声で、「上が敵か、下が敵か」と呼ぶと、与一（義忠）は、「上は景尚（五郎）、下が義忠（与一）」と怒鳴った。すると、俣野も「上が義忠（与一）だ、下は景尚（五郎）」と叫んだ。新五は暗闇であり、上か下か判らず、困っていると俣野が、「何をぐずぐずしている。鎧の色でも、そばに寄って見ればよいではないか」と怒鳴った。なるほどと、そばに寄って来た。

見られては一大事と、与一はいきなり新五を蹴り倒して脇差しを引き抜き、俣野の首をかき斬ろうとした。しかし、いくらもがいても斬れぬので、不思議に思って、透かして見ると、鞘（さや）のまま抜けていた。そこで、鞘を口に咬えて抜こうとしたが、先程斬った岡部の血糊が固まって遂に抜けない。その所へ走り寄った新五の弟新六定景が、与一の胡ろく（やなぐい：矢を盛って背に負う具）の間にこびついて与一の首をかき斬った。

一方、主君の義忠（与一）を乱戦の中に見失った家安は、主人の姿を求めて暗闇の中を彷徨（さまよ）ううちに、これまた、稲毛三郎の郎党に取り囲まれ、奮戦ののち戦死した。

この間に、頼朝は土肥の方面へと、山伝いに逃れて行った。

石橋山古戦場の歴史は、この程度にしておくが、当佐奈田霊社は、交通の発達とともに参詣の人が多く、発展興隆しつつある。

なお、詳しく知るには、東鑑（吾妻鏡）か相模国風土記を参考にされたい。

（注）与一と五郎の場面について

一説には、与一が上になり、五郎が下でもみ合っているところへ、与一の郎党家安が参り、「いずれが与一か」と怒鳴った。すると与一が、「上が与一、下が五郎」と言おうとしたが、折から風邪をひいており、治癒していないため「痰（たん）」が詰まっていたと言えなかった。すると、俣野五郎が「上が五郎、下が与一」と怒鳴った。家安は「上が五郎」と聞いて、上になっている主人の与一の首を誤って斬ってしまった。……とも言い伝えられている。

これにより、真田与一は「たんの神様・せきの神様・ぜんそくの神様」といわれるようになった。平塚市真田の天徳寺でも、寺域に与一を祀る霊社があり、毎年1月23日に、「与一祭り」（よいつつあんまつり・初与一）を行っている。

また、近隣の人々から、「真田の与一さん・真田のよいつつあん」と呼ばれ、厚い崇拝を受けている。

〔参考〕 真田与一討死の状況例

○：真田与一 ●：俣野五郎

組合せ	○与一：上 ●五郎：下	○与一：上 ●五郎：下	●五郎：上 ○与一：下	●五郎：上 ○与一：下
駆けつけた 郎 党	与一側の郎党	五郎側の郎党	与一側の郎党	五郎側の郎党
郎党の言	いずれが与一！	いずれが五郎！	いずれが与一！	いずれが五郎！
主人の言 （与一）				
主人の言 （五郎）	下が与一ぞ！	下が五郎ぞ！	上が与一ぞ！	上が五郎ぞ！

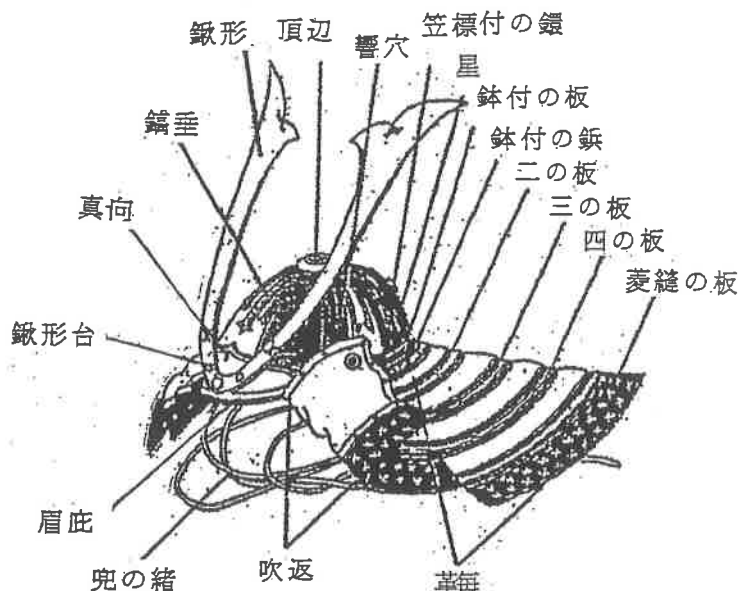
（注）この時、与一は風邪をひいており、痰が詰まって、言葉が出なかったといわれています。

（おことわり） 本文中における姓氏の表記については、参考文献により様々です。

特に、「大庭」は「大場」・「真田」は「佐奈田」・「工藤」は「公藤」という具合に表記されていますが、ここでは「大庭」・「真田」・「工藤」に統一して表記しました。

* かぶと [兜・冑]

① 頭部保護のかぶりもの。頭を入れるところを鉢（はち）といい、その背面に垂れて頸部をおおう所をしころという。首甲。首鎧。甲



* おおよろい [大鎧]

① 大型の鎧

② 装具完備し、兜や袖・草摺の形状が大きく作られている鎧。平安中期に成立、もっぱら騎射戦の行われた源平時代はその最盛期。南北朝頃は太刀・薙刀・槍による歩戦となつたので、大鎧の外に腹巻きに袖をつけて将士も用い、室町時代に入ると全く廃れた。

構造は胴・兜・袖及び小具足を具備し、雑兵の用いる胴丸・腹当の類に対する。

乗馬に適するように裾の開いた胴、背には逆板、草摺は4枚、その右側の引合に当たるものを胴から離して脇楯（わきだて）とし、弓をひくに便なるように胸は狭く脇を楽にし、弦走（つるばしり）をもうける。矢を防ぐためには兜に吹返（ふきかえし）、肩に大袖があり、梅檀の板、鳩尾の板、鳩尾の板は胸板のはずれを護る。

